

《論文》

職業的アイデンティティ理論に関する考察

—理論の系譜と研究の課題—

柴田 久美子

目次

はじめに

1. 個人にとっての職業の意味
2. 職業とアイデンティティ
3. 職業的アイデンティティ
 - (1)Hershenson,D.B.(1968)の職業的発達段階
 - (2)Marcia,J.E.(1964)のアイデンティティ・ステータス理論
 - (3)Super,D.E.とJordan,J.P.による職業生活段階
4. 職業的アイデンティティ研究の動向
 - (1)職業的アイデンティティの測定
 - (2)職業的アイデンティティの研究成果の概略
5. 職業的アイデンティティ研究における今後の課題
 - (1)職業的アイデンティティと行動様式
 - (2)専門職における職業的アイデンティティの問題
 - (3)職業選択と職業的アイデンティティ

おわりに

はじめに

人間の生涯において職業との関わりは深く、個人の生活や生涯、またそれに対する自己の満足感や評価などの意識のあり方に対する職業の影響は大きいと考えられる。経時的には、職業を選択し、職業生活を経て退職を迎えるが、この職業選択・職業生活が与える、個人の内的状況への影響は大きい。Erikson,E.H.は、ライフサイクルの展開に伴うパーソナリティ形成過程について研究する中で、アイデンティティ概念を発展させた。この研究の中では、アイデンティ

ティと職業の関わりは、青年期において形成され、さらに成人期以降に再構成されるものとしてのアイデンティティに、職業は大きな影響力をもつものと捉えられている。このように人間にとって重要な職業とアイデンティティ形成の関係、職業的アイデンティティ形成に関するこれまでの研究の中で、その理論的研究の系譜を整理し、職業的アイデンティティ研究における課題を検討したい。

1. 個人にとっての職業の意味

職業は、社会にとって重要な意味をもってお

り、経済、政治、宗教、教育などとともに社会の機能の中に組み込まれている。つまり数多くの職業によって社会は構成され、機能しており、職業が社会の維持や発展のために、重要な役割を担っていると考えられる。

さらに職業は、社会にとってのみではなく、個人にとっても重要な意味をもっている。松本(1992)は、職業の3つの側面として、「生計の維持」「社会的役割」「個性の発揮」があると述べている。これは個人にとって職業が、「生計の維持」という意味だけではなく、他の側面からの意義ももっていることを指摘しているものと理解できる。さらに、個人は自らの個性を最大限に発揮できる職業に就くことによって、自らの職業に満足し、自己を成長させることができると指摘している。こうした指摘を参照すると、職業は個人にとって単なる経済活動ではなく、「自己実現」の重要な要素となっていると考えられる。

2. 職業とアイデンティティ

個人の外的な状況のみではなく、内的な状況にも焦点をあて、その変容の過程を示した理論にErikson, E.H.のアイデンティティ理論がある。Erikson, E.H.の精神分析的個体発達分化の図式によると、人間の生涯は「乳児期」「幼児期初期」「幼児期」「学童期」「青年期」「成人期」「中年期」「老年期」に分類される。Erikson, E.H.の理論は個体の発達を、生物学的な側面だけでなく、社会との関わりの側面を重視して、心の発達を重視して捉えようとした点に特徴がある。またErikson, E.H.はこの8つのステージに、それぞれ固有の発達課題が存在し、同時にそれぞれ固有の心理・社会的危機が存在すると説明している。この中で、青年期の発達の重要な課題として、アイデンティティの獲得をあげている。Erikson, E.H.はアイデンティティとは、

「私はほかの誰とも違う私自身であり、私は1人しかいない。」という斉一性 (sameness) と、「今までの私も、ずっと私であり、今の私も、これからの私もずっと私でありつづける。」という連続性 (continuity) の2つの感覚が基盤になっていると説明している。このアイデンティティが獲得されることが青年期の課題であるとされている。同時に青年期は、職業を選択し、社会的に自立する時期でもある。この両者に関連づけて考えるならば、青年期における職業選択やその模索が、アイデンティティの形成に関わっていると考えられる。職業により、自分自身の価値を再確認でき、社会に認められた自分の地位や役割を認識することができる。このことから、職業選択が青年期におけるアイデンティティの形成と、大きく関わっていると考えられる。

しかし、アイデンティティの発達は青年期のみに見られるものではなく、人間の生涯を通じての課題であり、そこでも職業との関わりが重要な役割を果たしている。Fliedman, M.らは、「自分の仕事に対して感じる満足は、その人の生活全般に拡大され、職業での成功は自尊心を高めるのに大きな力を発揮する」と述べており、職業と個性の発揮・自己成長との関連を示している。つまり社会生活の中で、「生計を維持」し「社会的役割」を果たす職業と人間との関わりは深く、青年期におけるアイデンティティの獲得のみならず、その後のアイデンティティ形成をも職業的発達が規定していると考えられるのではないだろうか。このことから、職業的アイデンティティは、アイデンティティ概念の中でも重要な要素であると考えられる。

3. 職業的アイデンティティ

アイデンティティの中で職業にかかわるアイデンティティは「職業的アイデンティティ」

(occupational identity、vocational identity)として捉えられている。この中で、一定の資格を有する専門職業人(医師、看護師、カウンセラーなど)の専門的職業人としてのアイデンティティは、professional identityとして区別されている。本稿においては、「職業的アイデンティティ」(occupational identity、vocational identity)の理論について概観したいと思う。これまでの職業的アイデンティティについての、代表的な研究結果について検討したい。

(1)Hershenson,D.B.(1968)の職業的発達の段階

Hershenson,D.B.は、Freud,SとErikson,E.H.の発達段階論に示唆を得ながら、職業的発達の段階を構成した。この職業的発達段階理論は、アイデンティティという視点から構成されたものではないが、職業的アイデンティティの形成過程を検討するうえで重要である。Hershenson,D.B.は、人間の職業的発達の観点から、以下の5つの発達段階を区分した。

- ①社会的羊膜の段階……人間が胎児の時期から出産を経て言語や筋肉のコントロールを身につけるまでの段階である。この時期は、社会的な環境全体が羊膜のように人を包みこみ、乳児は受動的にそれを吸収する。親からの遺伝、出産前・後の母親の環境の状況、社会的・文化的背景などが後の職業的発達を制約することから、この時期は職業的発達の出发点となる。
- ②自己分化の段階……生育環境に調和した存在感を得、自己と非自己の区別に応じられるだけの言語能力を発達させると、子どもは自分のおかれた社会的背景から自己を分化させ、個別性を有する存在となる。子どもは物を用いて役割演技を繰り返す中で、「自分は誰なのか」という問いに答えよう

とする。

- ③有能性の段階……子どもが個別性のある存在として自己をコントロールできるようになると、今度は自己の能力(有能性)の限界を確かめようとする。すなわち「自分には何ができ、何ができないか」試してみようとする。前段階に発達させた態度や価値が、そのような試みの向けられる領域の選択に影響を及ぼす。
- ④独立の段階……前段階に学び取った「自分にできること」の中から「自分がしようと思うこと」を決定する段階である。エネルギーは自分の目標、すなわち職業に向けられる。ここで初めて、職業と直接に関連したプロセスが始まる。
- ⑤積極的関与の段階……前段階で選択したものに対する積極的関与が焦点となる。自分が選んだ職業に取り組み、エネルギーがここにつき込まれていく時、その職業は天職(vocation)となる。この段階では、「仕事は自分にとって意味があるのか」という問いの解決を迫られる。

この理論で注目すべき点は、最初の段階である社会的羊膜の段階など、職業に実際に従事する前の段階も示しており、職業的発達が、職業に就く以前からの過程を含むことを指摘している点である。またこの職業的発達段階理論は、段階ごとに職業における成熟度を示しており、職業的アイデンティティの形成過程を検討するうえで重要である。

(2)Marcia,J.E.(1964)のアイデンティティ・ステイタス理論

Erikson,E.H.のアイデンティティ理論を発展させ、新たな視点を取り入れた理論に、Marcia,J.E.のアイデンティティ・ステイタス(identity

status) 理論がある。またこのアイデンティティ・ステイタス理論は、アイデンティティに関する理論的概念を実証的に検討する方法の一つとして貢献している。この理論でアイデンティティは、4つの同一性ステイタスに大別されるものととらえられており、その測定法が確立されている。これによりアイデンティティ研究において、アイデンティティ・ステイタス理論を応用し活用することにより、その形成過程を調査することが可能となった。

この理論では、「危機」(crisis) と「傾倒」(commitment) の関連から、以下の4つのアイデンティティ・ステイタスを設定していることが特徴である。

- ①アイデンティティ達成型……危機（選択）の時期はすでに経験し、ある一定の職業やイデオロギーを自分の意思で選択して、それに積極的に関与している人達である。問題について真剣に取り組み、意志決定の時期（危機）を経験し、解決に達している。
- ②モラトリアム型……現在危機期にあり、意志決定をしようと模索している時期である。積極的関与の程度はあいまいで焦点化されていない。しかし、自己選択にあたって一生懸命に努力、奮闘していることが特徴的である。
- ③予定アイデンティティ型……意志決定の時期を経験していないにも関わらず、特定の職業やイデオロギーに積極的に関与しているタイプである。自分の目標と両親の目標との間に違和感がなく、親の価値観を引き受けて、予定された道を自分の道として歩んでいるようなタイプである。
- ④アイデンティティ拡散型……危機の経験の有無によって、2つのタイプに分かれる。危機前アイデンティティ拡散型は、これま

で本当の自分に直面したことがないので、自分の考え、自分の責任で何かを選択しなければならない事態になるとどうしたらよいかわからず、混乱状態になってしまうタイプである。危機後アイデンティティ拡散型は、積極的関与を拒否しているようなタイプである。いずれのアイデンティティ拡散型にも共通な特徴は、積極的関与を行っていないということである。

この理論は、職業に関するアイデンティティについても適用可能である。危機と傾倒の組み合わせにより、職業的アイデンティティのあり方を分類することができると考えられる。また職業選択においても、模索（危機）と選択した職業への傾倒の状況として、捉えることができると考えられ、これらの点がこの理論の特徴であるといえる。

(3)Super,D.E.とJordan,J.P.による職業生活段階

Super,D.E.とJordan,J.P.は、ライフ・ステージの考え方を導入して、職業生活に注目した職業生活段階(vocational life stage)を提示した。これは以下の5段階で説明されるものである。

- ①成長段階（児童期・青年前期）……自己概念（自分の性格や能力、身体的特徴などに関する、比較的永続した自分の考え）は、親や身近な人との同一視を通して発達する。子どもは、自分は何がうまくやれるか、何が好きなのか、他の人とどのような点が異なるのかに関して自らのイメージを作りあげる。
- ②探索段階（青年中期・青年後期・成人前期）……自己吟味・役割遂行・職業とのつき合

わせなどにより職業的探索が行われる。自分の欲求、興味、能力、価値観などの個人的な心理的特性が考慮され、暫定的な職業選択が試みられる。移行期（学校を経て労働市場または専門的訓練に入り、自己概念の充実を図る段階）、実践試行期（初歩的な仕事を与えられ、やがてライフワークとしてそれが試みられる段階）があり、この時期には職業を1～2回変更することもある。

- ③確立段階（成人前期・成人中期）……実践試行期で適切な分野が見つかったと、その分野で永続的な地位を築くための努力がなされる飛躍時期（30歳から40歳半ば）に入る。この時期は、キャリア・パターンが明確になり、職業生活の安定と保全のために努力がなされる。
- ④維持段階（40歳代半ば～定年退職）……この段階では、個人は自分の職業的地位をできるだけ長く維持することに関心を向ける。
- ⑤下降段階（65歳～）……定年を迎え、職業生活を終える段階。

4. 職業的アイデンティティ研究の動向

(1)職業的アイデンティティの測定

青年期のアイデンティティの形成において、職業選択のみならず、より広く職業との関わりについて検討することは重要である。このため、職業的アイデンティティの理論的枠組みについての研究がすすめられてきた。アイデンティティ理論と職業発達、相互関係を明確にした研究としては、Raskin, P.M.(1985)がライフステージとSuper, D.H.の職業発達理論の図式を関連づけて、発達課題を示した研究がある。これにより、職業発達の理論とアイデンティティ理論が結びつけられて考えられるようになったとい

える。特に、青年期において職業がアイデンティティ形成の主要な要因であることが認められ、職業は青年期のアイデンティティ形成の中核的問題であると考えられるようになった。

職業的アイデンティティの測定における研究では、前述したMarcia, J.E.のアイデンティティ・ステータス理論を基盤にした測定がある。これは、半構造化面接や質問紙調査を行うことにより、対象者の職業的アイデンティティを、4つの職業的同一性ステータスに分類しようと試みるものである。Holland, J.L.(1980)らは、「職業的アイデンティティ尺度」(VIS: Vocational Identity Scale)を開発したが、このVISを基礎として、その後多くの尺度が考えられることとなった。ほかに「エゴ・アイデンティティ尺度」(Ego Identity Scale)、「アイデンティティ感覚」(Sense of Identity)、「アイデンティティ問題」(Identity Problem)、「自己職業アイデンティティ尺度」(MVS: Vocational Identity Scale)などの質問紙が開発され、アイデンティティを職業的発達の視点で分析することが試みられた。これらの職業アイデンティティの測定方法の精選により、職業アイデンティティの発達とそれに対する介入の効果が検討されることとなった。

(2)職業的アイデンティティの研究成果の概略

Hershenson, D.B.(1968)の職業的発達段階の理論からも、職業的アイデンティティの発達を検討する際には、職業に就くまでの段階と職業に就いてからの段階との2側面からの検討が必要であることが理解される。しかし、重要な点は実際に職業に就くまでの段階において形成された職業的アイデンティティが、実際の職業経験の中でどのように変化・発達するのかという、連続性と不連続性を明らかにすることである。

これまで実際に職業に就く前の準備段階にお

ける研究では、アイデンティティ・ステイタス理論を応用し、職業選択や職業への積極的関与に関わる検討がされてきた。その中からは共通して、職業選択に際し、個人の内的問題（適職感など）が大きく影響することがあげられている。この段階での支援としては、職業指導・進路指導・キャリア・ガイダンスといった学校・行政・企業の3者が一体となった支援が必要とされていることが指摘されている。

職業に就いた後の問題については、職業生活の中でおこってくる危機（転換期）に焦点を当てて検討されているものが多い。それらの研究に共通する点は、実際の職業生活の中で、現実を受け取りなおし、自己に対するアイデンティティの修正・再定義が迫られるという指摘である。また、職業の準備段階で形成された職業的アイデンティティが、その後の職業的アイデンティティにどのようにつながるのかという点においては、個人差があり、同時に一部の専門職業などにおいては特徴的な傾向があることが指摘されている。専門職業に関しては、職業選択における積極的関与においても、一般的な職業と区別して検討する必要があることも指摘されている。

職業的アイデンティティの研究において、その主要な実践的目的の一つは、職業的アイデンティティの発達において、介入・援助を行い、成果をあげることにあるといえる。この点については、前述した職業的アイデンティティの測定方法の開発により、その成果の測定がある程度可能となっている。

職業的アイデンティティの発達とそれへの介入援助について、前述した概念・測定尺度を用いた研究が行われている。これらの研究成果をもとに、岡本（1997）は職業的アイデンティティの発達における、介入・援助プログラム検討の

際の注意点として以下の4点をあげている。

- ①実際の体験的活動が取り入れられていること
- ②参加している仲間同士の交流を重視していること
- ③学生の職業的アイデンティティのレベルによって好む援助が異なること
- ④参加者のプログラムへのコミットメントの度合いも大切になると思われること

さらに岡本は、成人期のアイデンティティの形成に注目し、「危機」を契機として自己の再吟味とアイデンティティの問い直しが繰り返され、ラセン式にアイデンティティが発達・成熟していくと考えた「アイデンティティのラセン式発達モデル」を提唱した。さらに、成人期におけるアイデンティティの発達の中で、自立した職業人としてのアイデンティティを形成していくことを課題として指摘している。成人期のアイデンティティの発達を規定している領域として、家庭生活を中心とする私的領域と職業を中心とする公的領域をあげている。この2領域において、個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティが成熟していくと指摘している。

5. 職業的アイデンティティ研究における今後の課題

(1)職業的アイデンティティと行動様式

職業的アイデンティティが、特に青年期・成人期において重要な存在であり、その形成を支援することが、個人のアイデンティティ形成に大きく影響することは理解されている。しかし、このアイデンティティの形成が個人の行動にどのように反映され、行動様式の変容をもたらす

かという点に関しては明らかにされていない。心理的な概念である職業的アイデンティティの形成が、職業上の成果に反映することが明らかとなれば、今後の職業人に対する支援・介入のあり方についての示唆が得られるのではないだろうか。

(2) 専門職における職業的アイデンティティの問題

一定の資格を有している専門職業人における professional identity については、学問・職種別にその職業的アイデンティティについて検討されている。現在の研究状況は、職種によって、各々の特徴ある発達過程が模索されている段階であると考えられる。

専門職業人における職業的アイデンティティの形成においては、その職業のもつ背景が大きく影響すると考えられるが、共通の要因として、職務への満足があげられている。しかし職務への満足感、職種の内容や性差などさまざまな要因が関連していると考えられる。このため、専門職業人の職業的アイデンティティの形成については、その職業的特徴を十分に検討するとともに、外的環境・内的環境を考慮し詳細に検討する必要がある。しかし、専門職業人の職業的アイデンティティの検討は、その成果を測定することが困難な場合（医療職など）も多い。このため、その専門職業において、どのような成果が期待されているのか、職業上の質の評価方法を検討することも必要である。

(3) 職業選択と職業的アイデンティティ

前述した職業発達理論においても、職業に就いてからだけではなく、職業選択の段階から職業的アイデンティティの形成が開始されていると考えられている。その段階での支援は、学校生活の中で、職業指導・進路指導・キャリア・

ガイダンスという形式で組み込まれている。しかし近年、新規学卒無業者の増加や若年層の早期離職職が増加してきており、問題視されている。企業の雇用体系をはじめとする社会情勢の変化の中で、適職感などの個人の意識を中心に職業を選択し、就職することが困難な状況である。しかし、職業選択がその後の長い職業生活の中でのアイデンティティ形成に影響することからも、十分な検討を行った支援策が必要であるといえる。職業選択における支援は、単に職業に就くという意味だけでなく、個人の生涯において大きな意味をもつことを重視して行われるべきである。

おわりに

職業的アイデンティティにおいては、生活構造との関わりが深く、全体像を概観するのみとなった。また、職業への考え方やあり様は、文化・社会的規範からの影響が大きいことも予測される。各々の職業についての背景を十分に検討したうえで、さらに具体的な考察が必要であると考えられる。

参考文献

- ・松本卓三 1992『職業・人事心理学』ナカニシヤ出版
- ・岡本祐子 1997『中年からのアイデンティティ発達の心理学』ナカニシヤ出版
- ・鐘幹一郎 他編 1984『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』ナカニシヤ出版
- ・鐘幹一郎 他編 1995『アイデンティティ研究の展望Ⅱ』ナカニシヤ出版
- ・中西信夫 編 1989『人間形成の心理学』ナカニシヤ出版
- ・D.E. スーパー 日本職業指導学会訳 1960『職業生活の心理学』誠信書房
(しばた くみこ、本大学院博士後期課程)